

宇宙論的自由と實踐的自由

— 自由の研究序説 —

柿 岡 時 正

1.

カントの批判哲学の出発点が物自体 (Ding an sich) の説であるとすれば、その目標は自由 (Freiheit) の確立であると云い得るであろう。彼によれば純粋理性の課題は神と永生と自由とであるが、神及永生は自由を介してのみその実在性と必然性とを與えられるに過ぎず、自由の概念は実に純粋理性の全体系の要石 (Schlußstein) であると云われるのである。

私は今このカント的な自由の概念に対し一種の内在的批判を試みようと思う。内在的批判とは彼と全く異つた別箇の立場から云わば超越的に批判するのではなく、一應彼自身の先驗的観念論 (transzendentaler Idealismus) の立場を肯定しつつ、しかも自由に関する彼の所説の欠陥を衝こうとするのである。この場合に於て論述は主としてカントの自由概念の混乱、即ち彼が先驗的自由の名に於て結合せんとした宇宙論的自由 (kosmologische Freiheit) と実践的自由 (praktische F.) とが実は全く異質的であり、彼の企図せる如き両者の結合は成立し得ないと云う事の究明に向けられるであろう。

自由の問題は「純粋理性批判」に於ける先驗的理念として最初に登場する。先驗的理念は三類に分たれるが自由はその中の宇宙論的理念に属する。それは範疇 (Kategorie) の四綱に準拠して四個あるが、その各々に関して所謂純粋理性の二律背反 (Antinomie) が成立する。自由についても、自然法則以外に自由による原因性 (Kausalität) を認める定立と、それを認めない反定立とが相対立する。(Kritik der reinen Vernunft, 2. Aufl. 1787, S. 472, 473 参照、尙本論文に於ては紙数の制限上原文の引用を省略した。但し重要な箇所には原書の頁数を記してあるから参照されたい。)

この宇宙論的矛盾の批判的解決に於て、自由による原因性は物自体そのもの働きとして認められる。(S. 566) カントは更にこの宇宙論的自由と人間の実践的自由とを結合せんとする。この事に関して彼は、自由の実践的概念は、自由の先驗的理念を基礎とするものであり、先驗的自由の廃棄は同時に実践的自由を壊滅するであろうと云っている。(S. 562)

併しながら私が今問題にしようとするのは実に此の点である。宇宙論的自由は決して彼の考える如き形に於て実践的自由と結びつくべきではない。本来理論理性の理念として取上げられた宇宙論的自由は、單に理論理性の限界内に於てのみ満足せらるべきであり、またせられ得るのであつて、特に実践理性的原理の導入を必要としないのではないかと思われるのである。

元來理論理性に於て取扱われている問題は單なる理論的認識であり、実践理性的要素は全く捨象せられているのである。それはカントが純粋理性批判はたゞ理論的認識能力にのみ関係し、快不快の感情及意欲能力を除外すると云っている事によつても明かである。かゝる態度は「純粋理性批判」の全巻を通じて一貫しているにも拘らず、宇宙論的自由の理念に於てのみ突如として実践的原理が介入し來るのである。この事は彼の詳細にして巧妙なる説明にも拘らず、不自然にして奇異なる印象を與えはしないだろうか。更に進んで云えば、この点にこそカントの純粋理性の全体系に於ける不整合と混乱との因子が胚胎しているのである。

2.

カントは何故に理論理性の理念である宇宙論的自由に実践理性的原理を導入し來つたのであ

うか。その最も重要な理由としてあげられるのは、彼が若干の宇宙論的理念に於て物自体的な制約 (Bedingung) を認容した事である。即ち彼は宇宙論的矛盾の批判的解決に於て数学的 (mathematisch) な理念と力学的 (dynamisch) な理念とを区別し、後者に於ては感性的 (sinnlich) な制約の系列の外に存する異種的にして可想的 (intelligibel) な制約を認容している。(S. 558, 559) この異種的制約を彼は人間の行爲の可想的な性格 (Charakter) 即ち物自体そのものゝ性格と考えているのである。(S. 567)

併しながらかゝるカントの見解には二つの重大なる疑点が生ずる。第一は力学的系列に於て物自体としての異種的制約を認容する事が果して妥当であるかと云う事であり、第二はもし仮に異種的制約を認めたとしてもそれは必ずしも 実践的自由 (可想的なそれであつても) とは結合し得ないのではないかと云う事である。

先ず第一の問題の検討から始めよう。彼は「純粹理性批判」に於て先驗的感性論 (tr. Ästhetik) 以來常に現象 (Erscheinung) と物自体とを峻別し、後者は全く人間の認識範囲外にあると考えて來たのである。彼はこの事に就いて次の如く云つてゐる。「我々の悟性 (Verstand) は斯の如くして消極的に拡張せられる。換言すれば 悟性は物々 自体そのものを (現象と 看做さずして) 理体 (Noumenon) と考える事に依つて感性に制限せられずして、むしろ感性を制限する。併し悟性はまた直ちに自己を制限する。即ち物自体をば決して何れの範疇に依つても認識せぬ、従つて之を未知的な或もの (unbekanntes Etwas) の名によつてのみ 思惟すると云う 制限を自己に加えるのである。」(S. 312)

もしこの説明が正しいならば、原因性の如き 力学的範疇に於てもそれが現象の限界を超えて物自体に迄拡張される事は全く不可能である。何となれば物自体が何れの範疇によつても認識されず、單に未知的な或ものとしてしか思惟されないならば原因性の 範疇と雖もその例外ではあり得ないからである。

然るにカントは力学的範疇の理性的使用に於ては物自体の 把握が或る程度可能である如く考へてゐるようである。この場合カント及その弁護者は云うかも知れない。感性及悟性に於ては物自体は不可認識であるが、理性に於ては物自体の把握も或は可能であろう。何となれば理性は悟性概念を可能的經驗の不可避的制限から解放し、之を経験的なものゝ限界を超えて拡張せんと試みるものであるからと。

確かに理性は經驗の限界を超えてその認識を拡張しようと試みる。けれどもその理性の企図は範疇を手掛りとする限りに於ては常に失敗に歸したのであつた。即ち理性が物自体そのものゝ制約としてのみ妥当的である絶対的總体性 (absolute Totalität) の理念を現象に適用した爲に、純粹理性の不可避的な二律背反が発生したのである。(S. 534) この事は数学的範疇に於ても力学的範疇に於ても全く同様であり、何れの場合に於ても定立と反定立とが全く同等の証明力を以て相対立したのであつた。

然るにかゝる理性の認識拡張の企図がすべて矛盾と混乱とに終つた後に、カントは改めて力学的範疇にのみ物自体としての異種的制約を認めようとしているのである。しかも何故にかゝる異種的制約が認められねばならぬかに就ては彼は必ずしも十分な根拠を示してはいない。彼はたゞ力学的範疇に於ては異種的なものゝ綜合を含むと云つてゐるだけである。(S. 558) 併しながら仮に力学的範疇が異種的綜合を含むとしても、それが單に現象相互間に於ける異種的なものでなく、現象に対する物自体と云う意味に迄解し得るかは疑問である。この場合異種的なものを物自体そのものであると考へ得る積極的根拠は何等存在していないからである。

元來物自体の認識は感性的直観によつては全く不可能なのであるから、もしそれが仮に可能であるとしてもその方法は範疇の理性的拡張以外には存しない。しかもそれは既に一應試みられて

失敗しているのである。その結果として生じた二律背反は、本来我々には未知的なものとしてしか思惟され得ない物自体に迄、範疇的認識を拡張せんとした人間理性の当然陥るべき不可避の結果であつたのである。故にこの二律背反から脱却して更に再び物自体の把握を試みる爲には、單なる範疇の解釈以外の新たなる積極的認識根拠が示されねばならない。然るに單に力学的範疇が異種的なものゝ綜合を含むからと云つてその異種的なものを直ちに物自体と認めんとするのは範疇による物自体不可認識の原理を破る爲には余りにも薄弱な根拠ではないか。(物自体が思惟であると云う事は根拠にならない。それはたゞ未知的なものとして思惟されるに過ぎないからである。)

のみならず假に力学的範疇を手掛りとする理性認識が物自体界に迄進み得たとしても、その場合物自体的な自由が端的に認められ得るとは限らず、却つて宇宙論的矛盾の單なる延長に終る結果となりはしないか。何となれば自由の定立が物自体に於て可能ならば、それを否定する反定立も同様に成立し得ると考えられるからである。従つて宇宙論的矛盾の解決を物自体に於て求めんとする事は無意味であるように思われる。

かく考えると宇宙論的自由を物自体として把握しようとしたカントの企図は根拠薄弱であり徒勞であると云わねばならない。然らば本来の宇宙論的自由は如何にあるべきであろうか。

3.

この問題に関して更に検討せられなければならないのは原因性の概念である。カントは自然に従う原因性と、自由からの原因性と二種類の原因性のみを認めている。(S. 560) 理論理性に於ける原因性の範疇が自然に従う原因性であり、それが單なる自然的機械性 (Naturmechanismus) 或は自然的必然性 (Naturnotwendigkeit) である事は明白である。然るにこの自然的機械性必然性の第一起始としての宇宙論的自由が何故に自由からの原因性でなくてはならないのだろうか。殊にカントはこの自由からの原因性を人間の可想的性格と考えているのである。併しながら本来の宇宙論的自由はかゝる人間の實踐的自由 (可想的であるにもせよ) を導入しなければ満足し能わないものではない。

彼は宇宙論的自由を、自然法則に従つて進行する現象の系列を自ら始めるところの原因の絶対的自発性 (absolute Spontaneität der Ursachen) と規定している。(S. 474) 即ちそれは自然現象の第一原因、或は自然原因の第一起始なのである。この場合自然を全体として見るか、或は個々の自然現象と考えるかは問題である。前者と解するならば第一原因は一つであり、後者とすれば多数ある事となる。併しながら自然を個々の現象と解する事は極めて不当であり不合理であると云わねばならない。何となれば自然とはカント自身の云う如く一切の現象の力学的全体であるからである。(S. 446) 自然をかく解するならば、宇宙論的自由は自然全体に対しその機械的原因の系列を遡源して求めた唯一の第一起始であるに過ぎない。

然るに實踐的自由は必ずしもこの條件を満たし得ない。人間の行爲は成程可想的性格としては自然的に無制約である如く見えるが、それは常に感性的性格を通してのみ原因となり得るのであり、後者は絶えず先行的自然原因に限定されている。従つて人間の行爲は感性的性格としてはもとより第一自然原因となり得ず、可想的性格としても精々個々の自然現象の原因たり得るだけで、全体としての自然には妥当し得ない。それ故に宇宙論的自由を實踐的自由と解する事は極めて不合理であり牽強附会的である。この場合我々は理論理性の問題に於ては意欲能力その他實踐的要素は捨象せられていた事を想起する必要がある。宇宙論的自由が單なる自然的原因性の範囲内に於て満足され得る限り、全く異質的な實踐的自由を導入しなければならぬ必然的理由は少しも存在しないのである。

それ故に宇宙論的自由は全体としての自然に於ける機械的な第一原因と考える事こそ最も妥当であり合理的である。この場合に於ても理性が不可避の矛盾に陥る事はやむを得ない。即ちかかる自然原因の第一起始を認める定立と、否定する反定立とは必然的に相対立するであろう。しかもその解決を物自体に求める事は根拠薄弱であり、且その場合に於ても二律背反が成立し得るであろう事は先に指摘した如くである。この矛盾は云わば人間理性の不可避の運命であり、これを除去する事は出来ないのである。

かく考えるとカントの本来の所説を合理的に徹底すれば宇宙論的自由は單なる理論理性の限界内の問題であり、彼がそれとして認めた実践的自由は寧ろ誤つてこの問題に混入し來つたものであると云わねばならない。従つて先驗的自由の名に於て理論理性と実践理性とを結合せんとしたカントの企図は根本的に変革を受けねばならぬ事となる。然らば理論理性と実践理性との関係は本来如何にあるべきであろうか。

4.

「実践理性批判」に於て、自由は道德律の制約としてその实在性が保証せられるのである。而してカントはその前提として、自由の概念は既に理論理性に於て蓋然的ではあるが、思惟する事の不可能でないものとして定立されたと考えているのである。併しながら彼自身述べている如くに物自体は不可認識であるばかりでなく、可思惟としてもそれはたゞ未知的な或ものとして考へ得るのみであつた。故に宇宙論的自由を物自体であるとする事が疑わしいばかりでなく、他方に於てそれはまた実践的自由とも実は無関係であつたのである。

従つて実践的自由が物自体であると云うのも、必ずしも十分な根拠を持たない事となる。この点に就いては紙数の関係上今は詳論出来ないが、本来物自体が道德律の制約としての自由の如き具体的形式に於て我々に意識される（單に実践的使用のみであつても）と云う事自体が既に根本的に再検討を必要とする事なのである。

何れにせよ先驗的自由が理論理性と実践理性とを結合し得ない事は明かである。然るに両者を結ぶ唯一の契機は自由の概念のみであつたのであるから、こゝに両者の関係は全く断絶した事となる。従つて理論理性と実践理性とが相互に如何に限定し合うか、またその場合に於て両者の何れが優越的であるかと云う最も重要な哲学的問題は、カントに於ては実は全く未解決に終つているのである。

この結果は彼が理論理性と実践理性との夫々の体系を樹立した後、更に両者の相互関係を精密に規定すべきであつたのに、理論理性の宇宙論的自由を実践的自由と混同した爲に両者の関係は既に規定され終つたと考えた事に由來している。即ち彼は問題が新に出發すべき時に當つてそれを既に終つたものと誤解したのであつた。その事が後に「判断力批判」に於て稍々具体的に取扱われんとした両者の関係を徒に不明確にして抽象的なものに終らしめた根本的原因ともなつているのである。

この意味に於てカントにより純粹理性の全体系の要石と考えられた自由の概念は、寧ろ全体系の不整合と混乱との原因となり、却つて彼にとつての躓きの石となつたと云わねばならない。従つて全体系は新なる観点から再編成されねばならず、理論的理性と実践理性との相互関係の問題は彼によつて解決されたのではなく、たゞ提起されているに過ぎない事となる。カント哲学が近世哲学史上極めて重要な意義を有するにも拘らず、却つてそれを超克せんとする多くの学派の出現を促したのは実にこの爲であろう。